―特集―

こどもの学び家

こどもにとって大切な「学び」。コロナ禍で、休校や外出自粛等、学びに重要な「体験」の機会が制限されました。その一方で、さまざまな人の取り組みにより、新たな学びのカタチが広がっています。どのような状況下でも、こどもの学びをとめないために、今私たち大人ができることを考えます。

多彩なイベントに学びのヒントがたくさん！

1 あさムシ！－いろんな虫とのであい／2 まゆだまころころ－初めてみるまゆ。何度もさわってころがしてあそぼう／3 たき火＆のこぎり体験－火を身近に感じよう／4 どんぐりであそぼ－どんぐりにもカタチいろいろ

こどもが笑顔になる理由

Chapter ❶ ｜ 学びの裏側

三田の豊かな自然を象徴する有馬富士公園と、その自然を生かした「体験」による学び場「キッピー山のラボ（三田市有馬富士自然学習センター）」。こどものいきいきとした笑顔にであえます。
三田ならではの学び場に、こどもが笑顔になるヒントを探ります。

三田ならではの学び場

毎年10万人以上が訪れる有馬富士公園。178・2ヘクタールという広大な自然広がる園内には、散策道や、遊具のある遊び場、棚田、日本の伝統的な暮らしを伝承するかやぶき民家も併設されるなど、さまざまな顔を持つ。来園者はここ数年増加。コロナ下、「密」を避け、有馬富士が見える福島大池周辺を散策する人も多く、夏以降は昨年の来園者を超える人気スポットだ。

そんな環境の中にある自然体験型学習施設が「キッピー山のラボ」だ。今年20周年を迎える同施設は、そのフィールドを生かした0～12歳向けの多彩なイベントが人気だ。当日参加が可能なことも魅力で、1日で200人が参加するイベントもあるそう。また、国内有数の自然・環境系博物館である県立人と自然の博物館（弥生が丘）と連携して、その道のプロフェッショナルがこどもに自然の魅力を案内することも、三田ならではの魅力である。

わくわくの裏側―こどもが輝くとっておきのこと

そうした魅力もさることながら、こどもが生き生きする体験プログラムはどのように

キッピー山のラボ ▶イベント P20

県立人と自然の博物館 ▶イベント P22

して生まれるのだろうか。

「こんにちは、はせるんです。こちらのお兄さんはよっしーです」―プログラム冒頭は必ずこの和やかなあいさつから始まる。彼らはコミュニケーターと呼ばれるスタッフ。この何気ないあいさつに実は秘密がある。「私たちは先生ではなく、対話しながら一緒に楽しみ、学ぶスタッフです」と話すのはコミュニケーターの長谷川真奈維さん。同じ立ち位置で接することで、こどもが自ら学びに向き合う環境を作っているのだ。また、体験の方法にも工夫が。「体験は未知との遭遇。こどもと大人とでは、一つの物事から受け取る情報量が圧倒的に違います。目の前の生き物を見て、これは何？触ってもいい？つぶれないかな？―そんな試行錯誤がこどもの目を輝かせます」だから、疑問を持つような余白を残す学ばせ方をするそう。どんぐりにはなぜいろいろな形があるのか、葉っぱの色はなぜ違うのか―プログラムの中に、普段近くの公園でも、こどもが輝く学びをつくるヒントがありそうだ。

有馬富士公園という自然の学び場は、三田のかけがえのない財産である。しかし、この自然も、魅力的な施設も、この場とこどもをつなぐ「人」と「思い」があるからこそ生きた学び場となる。こどもが笑顔になる理由は、コミュニケーターの存在抜きには語れないようだ。

自然体験×お仕事体験　**スタッフの楽しみ、やりがいは？**

―こんな学びの機会も！―

ジュニアスタッフ　自然について学ぶ

下山琉惺（しもやまりゅうせい）さん　10・ウッディタウン地区

やりたいことを自分で自由に探してできることが、とてもおもしろいです。知らないことを知れたときは嬉しくて思わず飛び跳ねます。三田の自然が大好きです。

ユーススタッフ　コミュニケーターとして学びをとどけよう

藤井莉子（ふじいりこ）さん　13・三輪地区

多世代と触れ合える大切な機会です。一番大切にしているのは「話し方」。皆さんが楽しく過ごせるように、一人一人に合った話の内容、表現などをいつも意識するようになりました。

とっておきの思い出を

コミュニケーター
長谷川 真奈維さん
はせがわ・まない

「きのこがパンみたいにやわらかい！」そう言って目を輝かせながら、こどもの表情がコロコロ変わるんです。そんなふうに笑う顔、まだ帰りたくない！と泣く顔、その両方に出合えた瞬間、こっそりガッツポーズしたくなるぐらい嬉しくなります。私たちの願いは、とっておきの思い出を持ち帰ってもらうこと。葉の香りをかいだら、柔らかい土に触れたら、赤く色づく紅葉を見たら―そんな何かのきっかけで、楽しかったそのときを思い出すような、深い記憶が刻まれる時間になることです。原体験のような記憶が、いつか、こどもの未来の何かにつながれば、そんな幸せなことはないですね。

こどもの今、学びの今。

Chapter ❷｜学びの変化

こどもの学びに欠かせない「体験」。新型コロナウイルス感染症（以下「コロナ」）の影響は、「体験の機会」にも及んでいます。コロナ禍で、こどもはどのような状況にあるのか、学びにどんな影響があるのか。学びの意義と重要性について考えます。

コロナで「日常」が一変

新型コロナウイルス感染症―昨年1月に国内初の感染者が確認されて以来、感染は拡大し、4月7日には、兵庫県を含む7都府県に緊急事態宣言が発令された。三田市でも同15日、非常事態宣言を発出。

「3密」を避け、感染拡大を抑制するため、「ステイホーム」「おうち時間の過ごし方」が提唱されるなど、日常の変化を余儀なくされ、目まぐるしく、先の見えない毎日だった。

学校では、2月に国から全国の学校に臨時休校が要請され、3月中旬には公立小中学校の99パーセントが休校に。三田市でも3月から市内の市立小中学校等が休校となった。

国立研究開発法人国立成育医療研究センターの調査では、コロナの影響によりこどもたちの73パーセントに何らかのストレス反応・症状がみられ、多くのこどもたちが、コロナによる環境の変化に苦しんでいたことがうかがえる。

学びの変化

このような状況は、こどもたちの「学び」にどのような影響を与えたのだろうか。明らかなのは、授業を受けられなくなっただけではなく、外出自粛などにより活動や交流が制限され、これまでの「体験する機会」が減ってしまったことだ。湊川短期大学人間生活学科の山田哲也教授（教育方法学）は「体験に基づいて考えることで、より深い学びになる」と学びにおける体験の必要性を指摘する。昨年から始まった小学校の新学習指導要領では、体験活動などを通じた「主体的・対話的で深い学び」が重要視されている。

こどもの学びは、豊かな人生を送るうえで必要不可欠であり、コロナの感染拡大は、こどもたちの「体験の機会」すなわち「学びの場」に大きな影響を与えた。

「学び」は、自分で考え対応し、それを生かしていく力を身につけることであり、生活と社会を豊かにするものです。かつて、高度経済成長期の学校教育では「知識をつける」ことが優先される傾向にありました。一方で、昔から「体験」による学びが生活の中にあり、それを活かすことにも繋がっていました。おもちゃがなければ竹とんぼを作ったり、農業で自給自足をしたり、こうした体験を通じて考えを深め問題を解決する力をつけていったのです。現代では、生活の利便性が高まり、そうした機会が減ったために、意識的に体験の機会をつくる必要が生じています。しかし、それは特別なことではありません。家庭での「対話」も、人の意見を取り入れ、自分の思考を深める体験であり、学びの原点です。

Tetsuya Yamada

体験は学びの原点

山田哲也 教授
湊川短期大学
人間生活学科

2020年	出来事
2月27日	安倍首相が全国の学校に臨時休校を要請
2月28日	市主催・市関連イベントの原則延期・中止
3月2日	市立学校の休校
3月11日	市立幼稚園の休園
4月7日	政府が兵庫県含む7都府県に緊急事態宣言
4月15日	三田市非常事態宣言
4月16日	政府が緊急事態宣言を全国に拡大
5月21日	一部を除き政府が緊急事態宣言を解除
5月22日	三田市非常事態宣言を解除
5月25日	緊急事態宣言解除
6月1日	市立学校園の再開

▶ 市立学校園等に係る主な出来事

こどもの学びをとめない！

Chapter ❸｜学びの核心ー本物に触れる体験

コロナ禍、「こどもの学びをとめない」と、三田では多くの大人が動きました。その想いは。こどもたちのために、今大人は何ができるのでしょうか。その核心に迫ります。

こうみん未来塾とは？

三田ゆかりの専門家や企業・地域人材との協働で、小中学生を対象に「本物に触れる体験」プログラムを実施。講師の一部を次のページでご紹介！

★詳細はホームページをチェック！

学びに新たな広がりが

約3カ月もの休校園、各種イベントの中止や延期の中、三田では、「こどもの学びをとめない！」を合言葉に、地域、学校園、企業など、多くの大人が動いた。

その動きの一つに、こどもたちに「本物に触れる体験」を提供する「こうみん未来塾」がある。動き始めたのは、緊急事態宣言発出直後。

オンラインを活用することで、自宅に居ながらも、「本物に触れる体験」を実現したのだ。一見、「体験」には不向きと思えるオンラインだが、予め参加者にワークシートを印刷してもらうなど、ちょっとした工夫をすることで、「体験」を可能にした。それだけではない。これまで応募多数だった人気講座も、より多くの人が受講可能になった他、自宅で親子が受講することも増え、親がこどもの学びに関わる機会が増えるなど思わぬ効果もあった。市健やか育成課の佐藤係長は「これまで、体験はリアル（対面）にこそ意味があると思っていた。オンラインも工夫次第で、こどもの体験につながる。可能性が広がった。」と意気込む。

三田スタイル

この取り組みは、文部科学省の審議会や国際展示会「CEATEC（シアテック）2020」で取り上げられるなど高く評価された。その理由はオンラインの活用のみにあるのではない。地域や教育機関、企業などが垣根を越えてこどもたちの学びのために連携したことにある。その「つながり」こそが三田スタイル。「三田のまち」そのものが教材であり、講師であり、学びの場なのだ。三田の学び場は、こどもを想う「人」が創り出し、支えていることを改めて教えてくれる。

Katsuyuki Ihara

井原克行さん
元日本航空機長

体験は自信となり、一番の財産になる

空から見る景色は、地図では想像もできない、体験して初めて分かる未知の世界です。その世界を通じて、学びの機会にしてほしいと、コロナ下でも座学を動画に、体験を完全個別にし、継続して操縦体験講座を実施しました。こどもは物事を驚くほど速く体で吸収します。体験を繰り返すことで身に付きそれが自信に。やがて体験という学びは一番の財産になります。大人は教え方を知らなくても、体験の機会と繰り返す大切さを伝えるだけで、あとはこどもが自分に合った方法で学んでいきます。

Miho Kodanaka

小田中美穂さん
カラータイプ教育
アドバイザー

違いを知って個性が輝く学び場を

「親であってもこどもと自分の価値観は違う」当たり前のことのように思いますが、気付きにくいことがあります。色彩心理で個性を色に置き換え視覚化する「カラータイプ」を用いたコミュニケーション法を伝えています。コロナ下、こどもと向き合う時間が増え「どう接すればいいか分からない」と保護者からの相談を多く受けました。学びは、こどもに合った場を選ぶことが大切です。こどもの個性は十人十色。まずはこどもの強み、弱みを客観的に知り、その個性を生かしたこどもが輝く場を探してみてください。

Mako Onishi

大西眞子さん（前左）
兵庫県立三田祥雲館高校
科学部天文班 班長

「楽しい！」から心に残る体験を

楽しい！―そう思えたら、本当に感動するし、その体験は心に残ります。それが学びとなり、将来の人生につながっていくと思います。コロナ下、星空教室をオンラインで実施することに。どうすれば楽しんでもらえるか頭を悩ませました。工夫したのは、星空を身近に感じてもらおうと、本物の夜空を望遠鏡を通して画面に映し出すこと。見終わると、質問が飛び交い、みんなの「楽しい」が伝わってきて嬉しくなりました。体験は新しい発見やなぜ？に出会える大切な機会だと思います。

問い合わせ＝健やか育成課559-5046

さんだの学び家

Chapter ❺｜学びの原点

いつの時代でも、どんなときでも、変わらないこと。こどもの学び場をつくるのは、環境でもない、モノでもない。人の「想い」がつくるということ。

「ころなからまもってくれてありがとう。かあちゃんはだいじょうぶですか」―コロナ禍、5歳のこどもから届いた「ありがとう」のメッセージ。日常の変化により感じた感謝の気持ちや気付きを募集した企画には、他にも100通以上ものメッセージが届いた。宛名は、家族、先生、お医者さん、友だち、スーパーの人・・・。こどものいろんな気持ちが見えた。突然一変した毎日の中で、こどもたちはいろんな思いを抱えながらも、自ら気付き、何かを学んでいる。自分を大切にしてくれる大人の姿をちゃんと見ている。そんなこどもたちに、私たち大人は何ができるのだろうか。

コロナ禍、こどもの学びの機会が大きく変化した。何ができるのか、こどもも大人も悩んだ。そんなとき、三田には、特技を活かして学び場をつくる大人がいた。つながりという学び場を守り続ける大人、こどもと一緒に笑い、悩み、喜ぶ大人がたくさんいた。

そこにあるのは、こどもの気持ちに寄り添い、どんな状況下でもこどもの学び場をつくり続けようとする「想い」。この想いが気付かせてくれること。それは、結局、いつの時代も、どんな環境にあっても、人を育てるのは人でしかないということ。

三田にはあたたかい家のような学び場がある。みんなでこどもを育てる「学び家」がある。今はまだ先が見えないけれど、しんどいときも、どんなときも、三田のこどもたちの笑顔を絶やさぬよう、一人一人ができることから。みんなで一緒にこの学び家をつくっていこう。

特集 こどもの学び家 ――完■

こどもの学びをとめない！

Chapter ❸｜学びの核心ー日常にある体験

こどもの学び場は、学校や講座だけではありません。人とのつながりや地域の「居場所」にあります。そんな学び場が、途絶えぬよう、「できることから」と奔走している人たちが地域にはたくさんいます。

一緒に喜び、一緒に悩む「他所の大人」の存在が大切

今井弘志さん
富士・寺子屋 代表

コロナ下、学校の授業の速さについていけるか心配で、マンツーマンで補習をしました。数学は一度つまずくと、ずっと苦しくなり、解けない自分に落ち込むこともあります。そんなとき、自分を認めてくれたり、一緒に悩む家族以外の「他所の大人」が近くにいることは大切だと思います。自信を持つことができますし、大人との関わりから学ぶこともあるからです。こどもの成長を我が子のように喜ぶ、そんな大人であり続けたいですね。

地域での学びがこどもの夢の選択肢になる

井上剛さん
おの・学びっこひろば
コーディネーター

こどもはいろいろな考え方にふれることで、描く夢の選択肢が増え、自分の可能性を広げられます。その選択肢を持てる場が学びの場だと思います。その一つとして、歌などを通じて世界の文化や習慣にふれる英語教室を開いています。学校帰りでも立ち寄れる場を地域につくることでこうした体験を繰り返せることが重要だと思っています。ここ小野地域から世界に羽ばたくこどもたちが生まれるよう取り組みを続けていきたいです。

こどもの「今」はたった一度、そのときだけです。今経験していることが、こどもの10年後、20年後をつくります。地区運動会が中止になったとき、代わりに地域で何かできないかと、こどもから大人まで参加するスポーツフェスタを開催しました。このような地域とのつながりの中で、人と関わって、こどもはさまざまなことを学び、社会性を身につけていきます。つながりによる安心感のもと、こどもの学びをみんなで育んでいきたいです。

日常からこどもとの関わりを

藤原慶子さん
すずかけキッズクラブ 代表

こどもも大人も「人とのつながり」の中で、新しいことを知り、気付くことで自ら学びを得ます。そんなつながりの場を、みんなの「できること」を合わせることでつくっています。コロナ下でも、どうにかしてこどもたちが人とつながっていられないかと、インターネットに詳しい人がホームページを作って、開設してくれました。地域にはいろんな力や想いを持った人がいます。こどもの幸せは大人の共通の願い。みんなでできることを持ち寄って、つながりの場をつくっていきたいですね。

できる人ができることを

長谷川智子さん
ゆりのき子どもネットワーク
地域コーディネーター（ぷちっとボラ代表）

ぼくわたしのがんばった

Chapter ❹｜学びの姿

日常が一変し、慣れない毎日。いろんな気持ちを抱えながらも、こどもは自ら何かを学ぼうと一生懸命がんばっています。そんな、たくましい姿を紹介します。

問い合わせ＝健やか育成課 559-5046

「子ども何でも自由研究」に応募があった作品の一部をご紹介します。好きなことに夢中になっていたら、こんな大作ができました！

三田市すごろく わくわくライフ三田

遠くへ出かけられない今だからこそ、自分の住む町の楽しい場所を探し直したいと思い、三田市をテーマにすごろくを作りました。

良いところばかり思いつくので、すごろくをおもしろくするためにマイナスポイントを考えるのに苦労した。

岩本湊太さん
けやき台小6年

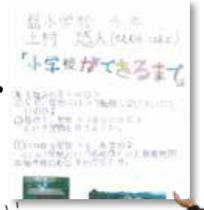
行け！BOX キュウブくん！

スクラッチでプログラミングしてゲームをつくりました。家族に意見を聞いて工夫したり、何度もやり直して、うまくいかないことも出来るようになりました。

背景を作ったら主人公の動きが悪くなった。主人公がスムーズに動くように仕上げるのが大変だった。

吉岡和哉さん
けやき台小4年

小学校ができるまで



みんなと一緒に遊べたり、教科を学べるから、学校が大好きです。だから毎日行きたいです。そんな学校はいつからあるのか疑問に思ったので調べました。

昔から、人と人が助け合って仲良くしてきたから、いまの藍小学校があると思いました。

上村悠人さん
藍小4年

キタキチョウのマーキング調査

どのくらい飛べるかを羽に番号を書いて調査。その数125匹！家から放したチョウの内、19匹と再会。平谷川周辺に多くいました。

毎日の散歩で他の虫も気になったけれど、今回はキタキチョウだけ探すことを頑張りました。

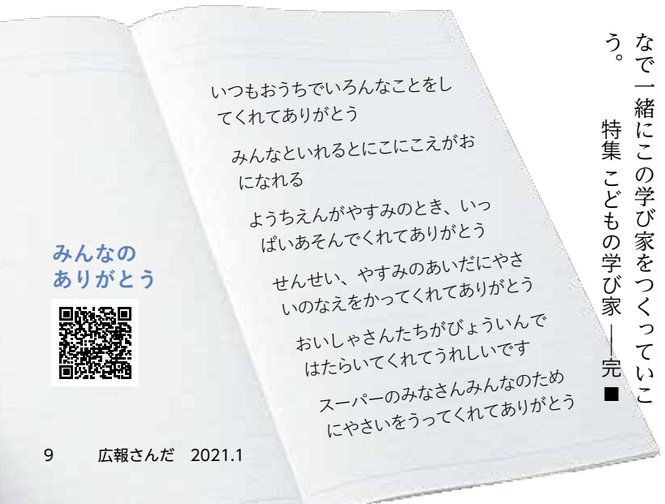
島岡優さん
ゆりのき台小2年

だいすきなかみこうさく

おうち時間、毎日、紙工作をしていました。お絵かき・色塗り・はさみがとても上手になりましたね。こんなにがんばったこと、ちゃんと記録しておくね。（母）

色も形もボールペンでかくこともテープもぜんぶがんばりました。いっしょうけんめい作りました。

吉田現さん
よこやま保育園年中



みんなのありがとう